

「いったい、この方はどなたなのだろう。」

(マルコによる福音書4：35－5：20)

今日の福音では、弟子たちに危難が襲いかかり、試されます。彼らは、はじめて挑戦を受けました。とんでもない恐怖の出来事でした。彼らは怖れに囚われました。これまで、いつも主イエスのそばにいて、奇跡を目撃してきました。その主イエスを疑うほどの恐怖でした。しかしこの恐れの中でこそ、彼らははじめてこれまでも一緒に旅をしてきた「イエスという男」がどのような方なのか、気付き始めることとなります。そしてここから、弟子たちと主イエスとの真の出会いの旅が始まります。

船が荒波に飲み込まれそうなり、狼狽する弟子たちに対し、主イエスは眠ったままです。完全に神に信頼しているからです。神はその信頼に応えて荒れ狂う波を静められました。これを目の当たりにした弟子たちは恐ろしくなり、「いったい、この方はどなたなのだろう。」と問います。荒波の恐ろしさもさることながら、目の前で人知を超えた出来事を起こした人間に対し、得体のしれない恐怖を抱くことは理解できます。ゾッとすると言いますか、畏怖と言うのでしょうか。奇跡物語はイエスという男が誰であるかを指し示す「しるし」です。水戸黄門の印籠を見て、人々が目の前のご老人が何者かを知り、「ははー」となるように、イエス様の奇跡もそれを見た者に、イエス様が何者であるかを知らせます。しかし印籠とは異なり、奇跡によって示されるものはすぐには理解できないものです。ですから、一体これは何だ？という疑問がまず起こります。しかしこの問から、イエスという男を知る旅がはじまります。

というのは、今日の福音にはじまるマルコによる福音書の4章35節～8章26節までには、五千人の供食やイエス様が海の上を歩く話しをはじめとする奇跡物語が語られます。この一連の奇跡物

語の締め括りである8章29節では、ペトロが「あなたはメシアです」という信仰告白をします。つまり、一連の奇跡物語によってペトロは、主イエスがメシアであることを知り、信仰告白へと導かれるのです。奇跡はイエスが救い主メシアであることを示す「しるし」だからです。今日の福音で「いったい、この方はどなたなのだろう」という問を得た弟子たちは、これから示される奇跡という「しるし」を目の当たりにすることで、主イエスが救い主、メシアであることを知ることになるのです。

先日、本駒込駅からすぐの、区立の駒本小学校の六年生二クラスに授業をする機会をいただきました。テーマは、「平和について」ということでした。あるときに先生が児童に「今の日本は平和だと思いますか？」と問いかけたところ、全員が「平和だと思う」と答えたことを受け、これはこれで良いことだと思いつつも、先生は強い違和感を憶え、今年一年掛けて「平和について」学び、最終的には自分たち自身でなにかできることはないか、具体的アクションまで結びつける授業を企画されたということでした。とても素晴らしい先生だと思います。ただし、わたしでいいのだろうか…とは何度も思ってしまったが、それでもお引き受けしたのは、「本当にそう？」と問いかけることがイエス様がこの世で大切になさったことであり、聖職がこの世界で常に持ち続けなければならない姿勢だと感じたからです。人々が当たり前のように思っていること、考えていることに対して、イエス様は「本当にそう？」と問いかけました。それにより、あゝ目の見えない人は、「罪故にこの人間は盲目になったのだ」という人々からの「決めつけ」による差別から解放されました。また罪深いとされた女性が人々から石打の刑に処せられそうになっていた時には、「では、罪を犯したことがない人間からこの女性に石を投げなさい」と問いかけられ、それぞれのうちに問いを起こさせることで、人々を真理へと導いたのです。聖職の役割

もまた、イエス様のようにはいかないことばかりですが、世界が愛から離れそうになっている時に、「本当にそれで良いのか？」と問いかけることです。また、世界の考え方が命を軽んずる方向に向かっているならば、世界に向かって、神が命を祝福されたことを告げ、命を大切にするようにと世界に問いかけることです。そのために、覚悟を決めて、小学6年制の授業を引き受けました。たった一人でも、「あたりまえに平和」と思っていた現実には、「本当にそう？」という疑問を持って帰ってくれたなら良かったなと思います。

宗教は人を思考停止させるものだ、などと言われることがあります。そういう宗教もあるかもしれない。しかし、キリスト教は全く違います。むしろ、いつでも「本当にそうか？」「これは一体どういうことだ？」と問を突きつけてくるものです。究極的に言えば、神を疑うことすらもまた、信仰生活においては重要なプロセスでありえます。今日読まれた旧約聖書、ヨブ記がまさにそのことを告げています。今日の箇所は、苦しみの中でついに神への恨み節を炸裂させたヨブのもとに神が顕現する箇所です。つまり、疑いや叫びの先にも、神が現れてくださる。むしろそこでこそはっきりと神の声をヨブは聞くのです。信仰生活において問うことは禁物では決して無い、ということです。むしろ主イエスとのまことの出会いは、主イエスを見つめることで生まれてくる問いの中で導かれます。たとえば、わたしたちも、奇跡物語を読んで、一体これはどういうことだろうか、と問う。片側の頬を叩かれたら逆の頬を出せ、そういうイエスさまの言葉に対して問う。聖書を通して、イエス様はわたしたちにたくさんのチャレンジをしてくる。そのチャレンジはわたしたちを霊的に導くもの、育てるものなのです。

荒れ狂う波に揺れる船は、教会にたとえられます。ならば、どうでしょうか。わたしたちは、主イエスのように、完全に神に頼れるのでしょうか。わたしたちは動揺し、葛藤するのです。それ

は無理だ、現実は厳しい、と言って、問うのです。イエス様、それができるっていうあなたは一体何者なのですか。しかしその問こそが、主イエスを真に知るための出発点になるのです。失敗は発明の母、という言葉があります。わたしたちと主イエスとの出会いもそうです。できない、一体あなたは何者なのだ！その叫びが主イエスとの出会いにつながるのです。そうしてはじまる信仰の旅の中で、わたしたちは主イエスと真に出会うことになるのです。

わたしたちは、決して忘れてはならないことがあります。それは、この船の上で動じることがなかった主イエスが、十字架の上で死んでしまう、ということ、です。十字架上の主イエスの姿こそ、わたしたちに最大の問を突きつけます。なぜ正しいイエスが十字架上で死ななければならなかったのか。そこにあるのは、自分の命を差し出してまで、神に従った男の姿です。何のためでしょうか。どうしてでしょうか。わたしたちは問わなければなりません。いや、十字架上の主イエスの姿を見たならば、問わずにはいられないはず。その問の先に、真の救い主の姿をわたしたちは十字架の上に見ることになるのです。十字架の死を目の当たりにした百人隊長は、「本当に、この人は神の子だった」と信仰告白をしました。わたしたちもまた、十字架上の主イエスを見つめるとき、真の答えへと導かれます。そこに、わたしたちの救い主の姿がある。

さあ、この礼拝から主イエスとの出会いの旅に出ましょう。主イエスを見つめ、わたしたちに迫ってくる問にとどまりましょう。必ずその先に主イエスとの出会いがあります。そのことを信じて、この礼拝をおささげしてまいりましょう。